

# 水田酪農地帯を歩いて

「新潟縣西蒲原郡味方村附近」

安孫子 六郎

冬型の気圧配置で関東は頗るの上天気であつたが、雪國に赴くというので房州育ちのY先生、K氏共に冬シャツにオーバーで身を包むといつた悲壯ないでたちであつたので、上野を出発する頃は汗が流れるほどの暖かさであつた。流石に上越線も水上附近に来ると山峡が迫つて来て嶺には真白な雪が見え、車内の空気も急に冷えて来て身の縮まる思いをしながら、やがて越後路に入ると空は曇り、雨が車窓を打ち、日没とともに展望ができなくなつた。

埼玉、群馬の水田は殆ど收穫が終り田畑に緑色を呈するものは白菜と大根ばかりでその間に「レンゲ」が僅かに緑を残してゐる。各所に点在する櫟林のみが黄色の葉を弱い冬の日に輝かせていた。

堤塘も畦畔も野草は枯れ果てて、冬眠に入り生色が無いこれらの場所に、冬でも青い牧草すなわち「フェスク」類や「トールオート」、「プレリー」等があれば家畜はよろこぶであらうなど、車窓に展開する農村の冬景色の移り変わりにも、草への連想が尽きない。

新潟駅には西蒲原郡味方村の薄田先生が出迎えて下さつた。われわれがこの土地に

来ることになつたのも先生の招聘によるものである。令息近也氏は（北海道野幌機農学校の卒業生で）われわれの案内役を引受けてくれた。

味方村の水田酪農を語る前にその概況を説明する必要がある。

味方村は水田単作地帯で信濃川の流域越後平野のほぼ中央にあり、上杉家が掘らせたという「中の口川」は満々と水をたたえて村境を流れ、水は豊富で早魃等の憂は無いという。耕地整理も夙に完成され、整然とした水田が地平線に消えて全く山の姿を望見できないといつた平坦地で、農家の構えも堂々として立派である。農道に接する畦畔には「ヤチダモ」が整然と並木をなし收穫期には架木となつて、十二段掛けに稲束がかけられるとか、灰白色の木の色は雪を待つ越後の國の豪家の如く極めて印象的である。收穫を終つた農家は、稲束を所狭きまでに納屋に取込み、脱穀機の廻転の音が各所で聞える。戸毎に最新式の農機具が取揃つており、動力耕耘機も三戸に一台くらは普及しているとのこと。村道には自家用オート三輪の往来が頻繁である。自噴の「天然ガス」に恵まれ、各戸で炊事場は

勿論、風呂場にも客間にも「ガス」の配管があり、大型の昔ながらの鉄瓶がガス台の上でたぎっている。味方村は水質が悪いので全村が水道化せられ炊事場、畜舎等水栓を一寸ひねると水が出る。というように、真に便利でこの点大都市の設備にも劣らない。これらの設備は特に婦人の過労を大いに緩和したことと思うが、いわゆる都会の有閑婦人では無く、質素な服装で宮々と働く姿は昔と変らぬ越後の人の勤勉さを現わしている。味方村附近は前述した如く、農村文化施設の「モデル」そのまま、筆者などのいる開拓地の現状と比較するとき、正に地上の楽園の如く感ぜられる。

かくの如く落ちついた農村になぜに水田酪農が行われるようになったかは誰しも知りたところであろう。豊凶の差も少なく土地も肥え、今年を反当十俵近い収量を得ている人が多い。何を苦しんで酪農などに手を出すのだという人も無いわけではない。

酪農の生まれた原因は革新的な青年達によつて次の二点の解決を計るためであつたと近也君はいう。

- (1) 農村食生活の改善
- (2) 地力の増進

食生活の改善を企図したのは、米の豊富な地帯に共通な米の過食によるいわゆる白米病である「脳溢血」と「胃腸病」の多発、そして米の偏食に伴ない動物蛋白質と脂肪の摂取不足は壮年期の人々の早死を招く。冬の野菜の不足と日照の不足はさらに雪國の人々の健康を損う原因となるであろう。この解決策として酪農をやり、牛乳を村内

に自給し、特に学校給食を通じて子供らに牛乳飲用の習慣をつけ、体質の改善を図るなど、村百年の繁栄は農民の健康を護るにありとの結論を得たのである。

根岸酪農組合では小笠原正男組合長（薄田氏女婿）橋本専務理事外元氣溢れる組合員諸氏と懇談する機会を得たが、組合員が徒らに高乳価を望まず、組合の内容充実と村内飲用乳の確保を考え、新潟市へ出荷すれば高く売れるのであるがえてこれを行わないという点が他に見られないところであろう。目前の営利追求が急なるまま、家庭の飲用乳さえ惜しみ、一滴の乳すら金に変えんとする日本酪農の一部の姿を思うとき、この組合の理想の高遠なることに敬意を表せずにはおられなかつた。

地力の増進については、土地改良も進み灌排水の問題も解決し、畜力耕耘に代つて動力耕耘機が入り、車や稲舟が「オート三輪」に代るようになると役畜の数が必然的に減少して来る。従来堆肥作りを兼ねていた牛馬が減少すると良質の厩肥が得られなくなる。一方増収のために硫酸などの化学肥料が増施され、土壌を酸性化する。裏作の「レンゲ」もそのまま緑肥として鋤込むことが多年に亘ると、その方法によつてはこれまた減収の原因となることが明らかにあり、多くの金肥を使用しても病害や、秋落ちにより、却つて減収を来す逆現象に対して、裏作のレンゲも家畜の腹を通して厩肥とし、稲葉も乳牛の褥草として価値高き有機質肥料と変える。裏作は全面的に飼料作物を作り、稲葉の飼料利用を極度に制限して、乳牛の健康と能力を高めるなどの方

法が最も賢明なる経営方法であることが判り、前述の食生活の改善と一石二鳥の目的で酪農が取り入れられたのである。

根岸酪農組合は以上の如き環境と着想のもとに創立せられ、歴史は浅いが、北海道その他の先進地に人を派し、技術の修得や乳牛の導入を計り、牛乳処理所の完成、集乳、販売等頗る活潑な活動をしている。組合員は畜舎の新築、改善、堆肥舎の建設、尿溜、サイロの設置など着々実務活動を推進しているので、今後の発展は期して見るべきものがある。

今後この地帯で取り上げられる問題は飼料経済と繁殖障の予防が重点となる。この点について若干説明したいと思う。

繁殖障の対策は早期発見と治療にあり、その直接原因ともいふべき種糞の多給や、濃厚飼料の過給を止め、優良な牧草、青刈などの自給を真剣に考えねばならぬ。

乳牛を水田地帯に導入し、生産乳の自家飲用を第一とし、余剰は売り、米飯の過食を是正し、健康を守り、一方豊富な葉は家畜の褥草とし、裏作の「レンゲ」その他も牛の腹を通して、貴重な有機質肥料を増産することにより、硫安の如き窒素肥料は大幅に節約できるのみならず、水稲は逐年増収して生産費の切り下げは一挙にできるであらう。

飼料はできるだけ自給飼料をもつてし、飼料経済を考えねばならぬ。飼料作物は実取りでないから短期に随時収穫でき、飼料価値は常に実取りに勝る。さらに牧草、青刈飼料は若いときほど蛋白質が多く、家畜が好食するので、刈取りも常に早期に行い得るので田植には差支えない。青刈で利用しつくせないほど豊富に生産して、残余はサイロに埋蔵して田植後の飼料不足に備え

るのである。

水田酪農の飼料自給方法として、おおよそ次の三つの方法が考えられる。

(1) 裏作による飼料自給法

(2) 田畑輪作法

(3) 田畑両方よりの飼料自給法

味方村附近では(1)及び(2)の方法が考えられる。耕地面積が広いので(2)の方法などが却つて徹底し将来の発展を早めると思うが裏作に牧草を作ること、怠者のやることと称するような人達もいる。現在青年たちが決意しても、相当の抵抗があると思われるので、裏作法を完成し、実績を挙げて、人をして承服せしめて漸進的に進むことがよいと思う。

裏作を主体とした場合、田植後の飼料自給は窮屈になるから、サンマー・サイレージの準備と畦畔堤塘の草生改良を進めて行かねばならぬ。

裏作には栽培経験の深い「レンゲ」や「レープ」(青刈菜種)とともに「赤クロバ」もよい。田植えが遅くともよい場合は「赤クロバ」は二度刈できる。また「レンゲ」の生育不振な田には水湿に強い「アルサイククロバ」が適当と思う。クロバ類の播種期は八月下旬より九月中旬頃、レンゲと同様の方法にて播き、ライ麦やエンバクはこれより遅れてもよいので九月下旬〜十月中旬まで可能と思われる。自給飼料も乳牛に対してもなるべく多種多様なことが好しくかつ労力の分配、播種期や給与期間などを考え、計画的に作付けすることが肝要であらう。この地帯は現在のところ導入されている牧草の種類も少ないようであるが冬期の多汁飼料として根菜類をも用意すべきで「紫かぶ」(早生)や移植のできる「下総かぶ」なども導入することが好ましいであらう。

であらう。

畦畔堤塘の草生改良には地下水が高く、肥沃な点から「ラデノクロバ」などが適当と思う。これらの試作を御奨めいたしたい。またフェスク類、オーチャードなども面白いように観察された。この地帯は良好な地味とやや広い耕地と機械化された農機具など、条件は揃っている。固い団結は如何なる障得をも打破し、水田酪農の「モデル」となり、日本農業の指針となることを確信するものである。

岩室酪農組合

岩室の酪農組合は根岸組合に比してさらに数年間の歴史を有し、処理工場も持ち、組合員も多く基礎も固い。裏作の飼料作物も相当取入れられ、やや完成された組合という感を深くした。

堀越組合長は、那の酪農組合長をはじめ幾多の公職や酪農高等学校の校長を兼ねられ、玄米食と牛乳の生活を自から実践され談論風発、頗る快男子である。同行のY先生は請わるままに早速近隣の乳牛を診察され、適確な診断を下されるので陸続と乳牛を連れ集り、時間の少ないのに困る有様であつた。

根岸と同様にここも繁殖障による空胎牛が多く、稲葉酪農の弱点が顕著である。Y氏は早期診断と治療、根本的には自給飼料を増産して稲葉の給与はできるだけ控え、優良なる自給飼料を豊富に与え、濃厚飼料の節約を図るとともに健康な牛を育成することを重ねて力説された。

稲葉と濃厚飼料の多給は「アシドーシス」を招き、韌帯が弛んで前肩が下り、キングコング式の肩の垂れた乳牛が散見された。水田地帯として稲葉及び米の加工副産物の糠や屑米などが多給され、稲葉の栄養不

足から濃厚飼料を多量に補給せざるを得ない事情にあるが、これが水田酪農の致命的欠陥であるので、牛の健康と飼料経済の二点から牧草や青刈飼料の増産が緊急を要するものと思われる。岩室村は根岸方面より幾分畑作もあり、畜力あるいは動力が各戸にあるので、決意さえあれば直ぐ実行できることと思う。

気候的にも東北や北海道高冷地に優り、地力もあり、農家の経済力も強いのであるから、真の水田酪農の発展のために草の栽培をさらに真剣に取り上げべきと思う。

乳牛を稲葉の中から牽き出し「レンゲ」や「クロバ」などの牧草の上にたたしめることが肝要である。

日本の水田地帯の土地改良が進み裏作ができるようになり、役畜が減少し、オート三輪車が増加し、耕耘機が普及して来ると地力増進の問題は用畜の導入に俟たねばならない。水田地帯では特に動物蛋白と脂肪を摂取して健康を保たねばならない。好むと好まざるとにかかわらず耕地と家畜が結びつかねば日本の食糧の自給もできず、農家生活の発展はない。現状維持では、日本はますます行き詰り、将来相当の困難に陥ることは明白なことである。と堀越組合長は説かれる。筆者もまた満腔の同意を表するものである。

日本一の米どころの新潟県の中での「米どころ」と称せられる西蒲原郡に、憂国の農民の力強い団結のあることを知り、この烽火が全国の水田地帯に燃え広がり、同志相呼応することにより合理的な食糧増産ができる、しかも健康な農民がその生活を築しめる日が遠くないことを確信して帰路についた。(昭和三十年十一月)

(雪印種苗・千葉農場長)